

生涯発達医科学に思うこと

牛島廣治

東京大学医学部健康科学・看護学科教授(母子保健学)

わたくしの属している健康科学・看護学科母子保健学教室は、大学院重点化に当たり、国際保健専攻発達医科学となります。母子のみでなく、生涯にわたる発達を取り扱うことを意味します。

教室は職員、大学院生、研究生、客員研究員から構成され、専門分野も医師、助産婦、看護婦、保健および理学等々さまざまです。

また教室には家庭を持たれた女性の方も多く、それぞれ自分の目標に向かって研究を続けられております。

ごく最近、「開かれた教室」を目的として、関係する他大学、研究所、民間企業等々と懇話会を始めました。どなたでも参加できるオープンな会です。教室内外の方々の交流を図る有意義な会と考えています。

研究の目的はそもそも一つのことを十分に深め、新しいことを見出し、社会に還元することにあります。そのためには常に幅広い知識と技術がより必要になってきました。このことは一般社会と共通します。新聞には社会的な記事とともに先端科学の記事が日常的にみられます。「ニューズウィーク」「ナショナル ジオグラフィック」がすべての層に広く読まれるようになり、「ネイチャー」でさえも広く読まれるようになってきました。NHKの放送大学も利用されるようになりました。コンピューターの普及、インターネットの導入等も境をなくす方向に向かっております。情報の迅速化で

地域差がなくなりつつあります。60歳はまだ“漬垂小僧”と言われ、60歳後の生き方が話されている今、生涯発

達医科学は生涯教育にもつながる重要な役割を果たすと言えます。

このような状況下で実験系の研究から調査などの非実験系の研究へとスイッチすることも必要になることがあるでしょうし、また両方を同時に行なう必要もあるでしょう。当教室においても最近では実験系・非実験系の研究に境がなくなってきたことを感じます。一つの仕事を生涯続けられる

ことは幸せかも知れませんが、そのなかですら常に柔軟性が要求されていると思います。

それと同時に、研究における言動に対する責任を問われることが、最近はより大きくなったと思います。研究結果の責任を自分で負うことはも

ちろんのこと、情報が広く伝わるようになり社会の反応がより大きくなったということです。自分のあずかり知らぬ方から便りがくるのはまだ良いとしても、突然新聞、テレビの取材となると、その反響を考えただけでも大変です。その上研究は成果の質も問題視され、外国の研究評価に耐えることが必要となってきました。この事は研究者以外の社会一般と同じことです。

好むと好まないに限らず、発達する社会に適応していくことが要求されております。そのなかで見失っていたもの、あるいは忘れかけていたものが返って便利であったり、人間らしさを復活させてくれる事に気づくことがあると思います。皆さんのまわりをもう一度ゆっくり見渡して見ませんか。そして提言あるいは行動してみませんか。

